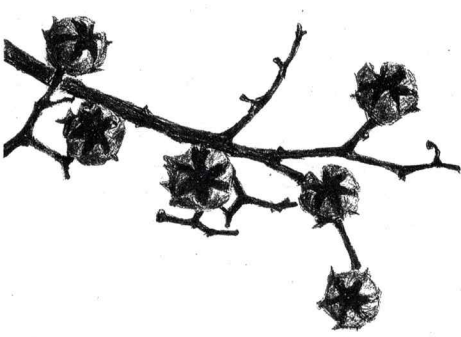


朝日 俳壇



日高理恵子 (サルスベリVII)

◆高山れおな選

- 寒満月飛び出しそつな竹とんぼ (前橋市) 石川 秀雄
- 枯蓮や龍ごならざる鯉(ご) (所沢市) 木村 佑
- 白菜のミルフィーユ鍋吹いて食べ (川崎市) 小関 新
- 寒の水棒の如くに飲み干せり (境港市) 大谷 和三
- ゆずの香ののこるタオルに体ふく (成田市) かとうゆみ
- 熊肉が届きスコッチ返しけり (綾瀬市) 秋元 謙治
- つまらんな山は眠るし誰も来ぬ (郡山市) 寺田 秀雄
- 黙々と枯野の黄蝶まごひつく (箕面市) 櫻井 宗和
- 臭ひなき戦桶見ている炬燵かな (樺原市) 上田 義明
- 寒に入る死んだ目で女銀行へ (三浦市) 松本 礼子

【評】石川さん。輝きわたる月光。その緊迫を破るものとして、竹とんぼが想像裡に呼び出された。木村さん。登龍門の伝説を踏まえる。冬の水をよぎる悠然たる影。小関さん。今風の、しかも長たらしい料理名を句に。軽妙な出来栄えだろう。

◆小林貴子選

- 初春の地が裂け立つてをられない (羽咋市) 北野みや子
- 水鳥の泣きたきときは逆さまに (所沢市) 藤塚 貴樹
- 冬草のむしろ藍色はかりなり (糸魚川市) 早津 邦彦
- 看護師の白衣五色や冬ぬく (横浜市) 前田なみき
- 弱くても吾は母親を牙ゆる星 (大阪市) 長島 敬子
- 枇杷の花南極にでも行くのかえ (沼津市) 米山隆太郎
- 膝掛は重しと母の腿細し (国分寺市) 野々村澄夫
- あしらひの巧みな冬の蝶 (尾張旭市) 久永 満
- はつみくじ(こ)の人とならうまくい(こ) (成田市) かとうゆみ
- 朝俳句昼日向ぼこ宵酒宴 (川崎市) 神村 謙一

【評】一句目は能登から寄せられた句。皆様にお見舞い申し上げたい。二句目、お尻を垂直に空へ向けているのが悲しい時とは思わなかった。三句目、冬草が藍色めいて見え、不思議の感に打たれる。四句目、白衣といえど薄色、そこが素敵。

◆長谷川耀選

- 恍惚の国へ一駅日向ぼこ (神戸市) 高橋 寛
- 遠き空より風花の遊びに来 (下野市) 久保田 清
- 御慶さへ憚るる世になりにけり (市川市) をがはまなぶ
- 母の太股なつかしき湯婆かな (長岡京市) 川埜 楓
- 初手水ゆらゆらと龍水の中 (我孫子市) 森住 昌弘
- 在米の獄中歌人受く初日 (浜松市) 梶 まり子
- 太陽系に在ることの幸初御空 (八幡市) 小笠原 信
- 夫婦して時間長者やきな粉餅 (長崎市) 下道 信雄
- 爆心の空に横たふ寒銀河 (長崎市) 佐々木光博
- 熱燗や政治の話題なくなりぬ (東大和市) 田畑 春醉

【評】一席。電車の日なたの席にすわっているのだろうか。うとうとと眠くなる。二席。はるばる人間の住む地上まで。歓迎の一句。三席。能登の大地震、日航機炎上。吹き飛んだお屠蘇気分。十句目。あきれるばかり。こきおろす気も出ない。

◆大串 章選

- 激震や朝市の声凍てつき (青森市) 池田 毅
- 読初や今年も百冊読むつもり (山梨県市川三郷町) 笠井 彰
- 野地蔵の人めく笑みや毛糸帽 (広島市) 谷脇 篤
- 香車めく師の一生や寒椿 (京都市) 室 達朗
- 育て上げ看取りも終へて日向ぼこ (奈良市) 橋本 靖子
- 月光へ一歩踏み出す雪だるま (塩尻市) 古藤 林生
- マスクなき美女とマスクの老婆かな (東京都世田谷区) 岸田 季生
- 大雪や独居の母は白寿なり (横浜市) 坪田 光世
- 正月を真つ二つにし大地震 (八王子市) 額田 浩文
- 被災地の能登に無情の雪降れり (伊賀市) 福沢 義男

【評】第1句。1月1日、観光名所でもある輪島朝市が大地震に襲われた。突然の衝撃に言葉を失う。第2句。添書に「現在八十三才、三十年以上百冊読破中」とある。すばらしい。第3句。毛糸帽を被った野地蔵。「人めく笑み」が優しい。

俳句時評 風土のふくらみ

阪西 敦子

地に根差した俳人が描く風土は、旅で訪れるのとは違う視座を与えてくれる。2023年12月刊行の第1句集『起のつら』(北辰社)で、一章を費やして森羽衣が描いたのは、ふるさとで、今も母を訪ねてしはば帰省する石川県・能登の風土だ。〈累代の石載せられて蓋の桶〉では、その昔から漬けられてきたものの上に載った石を描き、「累代」といつからとは知れぬ時の積み重なりを表す。〈ふるさと座敷広びる咳ひつく〉

では、広く構えた昔ながらの座敷に、冬の空気が張りつめる。同時期刊行の浅川芳直の第1句集『夜の景の奥』(東京四季出版)。浅川は宮城県名取市に生まれ、東北にゆかりのある若手俳人による同人誌「むじな」の刊行も行う。〈田は闇に沈み一軒の灯涼し〉では、その地の田の広さや家の少なさを、蟻の道水平線の迫りくる〈では、遮るものない陸と海が、蟻という小さなもの側からスリリングに描かれる。〉

やはり同時期に刊行された桐山太志の第1句集『耳梨』(ふうんす堂)は、拠点とする奈良の大和三山のひとつ耳成山の古い表記から名づけられた。〈聴真仕掛けて風呂を熱うせり〉では喜らしを守るために風呂を仕掛けた体を熱い風呂に浸して心を鎮め、〈鯉濃や風突つかかる窓に雪〉〈老鹿の黒光りせる初時雨〉では、特別なものとしてではなく日常に溶け込んだ鯉濃、鹿を描き、この地での生活のありようが淡々と知られる。風土を描くこと、それは季節や句の世界にふくらみを与え、また見地への想像力を読者に与えてくれる。(俳人)

正岡豊歌集「白い箱」 「四月の魚」刊行後、33年ぶりに出した第2歌集。「韻律がほくを忘れた夕暮れにきみはわらびもちぶらさげてくる」(現代短歌社・2970円) 枅野浩一・pha・佐藤文香編著「おやすみ短歌」 「三人がえらんで書いた安眠へさそってくれる百人一首」という副題の通り、百首を鑑賞文とともに紹介。(実生社・2750円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8861 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信